

うるしアンソロジー
二〇一五年版



うろこアンソロジー二〇一五年版 目次

忘却の川	南原充士	3
負んぶ	高田昭子	5
豚薄切り肉	南川優子	8
オペラ・エクローグ『同級生夫婦』 第1回	有働薫	11
闇から闇へと旅する 台本	富澤守治	16
午前 林を歩く	清水鱗造	25

忘却の川

南原充士

過去に学ぶ

学び過ぎて 軛にならぬように

過去を思う

思い過ぎて 引きずらぬように

過去を反省する

自らを責め過ぎて 萎縮しないように

過去を忘れる

ときにはすべてを 忘却の川に 流し去る

それでも 過去は 夢の隙間から
涙を流し 枕を 濡らすだろう

負んぶ

高田昭子

電車の中でベビーカーに足を踏まれた

したたか痛いけれど 私は何も言わないわ

女性による女性バッシングはしない

年長者は若い人にお説教をしない

世の中が電車にベビーカーを許す時代が来たのだから

新しい一歩なのだから

それでも密かに思う……

「負んぶがいいなあ。」

かつての記憶が立ち上がる

まだ歩かない幼子が目覚めて

姿の見えない母親に抗議の泣き声をあげる

その声と呼ばれて 幼子を抱きあげて

負んぶをしながら料理をする

掃除をする 洗濯物を干す

互いの温もりを混ぜて

幼子の息づかいや声を聴きながら

私は幼子よりも安らいでいたのだろう

後ろ髪を引つ張る幼子

「負んぶはいいなあ。二つの手が自由になる。」

幼子は祖母にも負んぶされる

そうして祖母は若い母親の小さな時をなつかしむ

「あなたを負んぶして満州から引き揚げてきました。」

この極め台詞にはまいるぜ

一九四六年秋

二歳の私を負んぶして無事に故郷に着いたとたん
腰を抜かした母の背中から

私を抱き上げてくれたのは祖母だった

その祖母の背中が好きだった

「高田馬場です。」

電車を降りる 背中には小さなりユック

駅の売店の新聞には若者のデモのニュース

「いいなあ。 NO WAR!」

豚薄切り肉

南川優子

豚薄切り肉は

わたしが住む国では
一センチほどの厚さ

豚薄切り肉は

わたしの生まれ故郷では
二ミリ以下の厚さ

満員電車とは

わたしが住む国では
隙間がいくらかある空間

満員電車とは

わたしの生まれ故郷では
わずかの隙間もない空間

蒸し暑い日とは

わたしが住む国では
うっすら汗をかく日のこと

蒸し暑い日とは

わたしの生まれ故郷では
べったり汗をかく日のこと

けれど 時おり

わたしが住む国で
言葉の違う人々に

語らなければいけない

わたしの友が どれほどの親しさか

わたしの悲しみが どれほどの重さか

わたしの愛が どれほどの深さか

オペラ・エクロージュ 『同級生夫婦』 第1回

有働薫

——オペラの下書きとして

登場人物

マリー・アントワネット

ウォルフガング・モーツァルト

テークラ・モーツァルト（従妹ベーズレ）

コンスタンツェ・モーツァルト

ピアノの女弟子（モーツァルトに夢中でピアノの上手な）

ルイ18世（囚われの幼年王、亡霊）

執事

幕の前

前口上 歴史学者の老人…

早すぎる死を乗り越えた二人が、ずっと未来に

天上の雲の上で再び青年に生れ変わった

ウォルフガングは6歳当時の約束を守り

アントワネットに求婚し

3ヶ月ほどお姉さんの同級生夫婦が誕生した

母のマリアテレジアが結婚の祝いにハプスブルグ家の広大な領土のうち

いちばん北の架空の1国を再婚のモーツアルト夫妻に贈与し、夫妻は晴れて

この北の国の青く透き通った湖の畔に静かな家庭を持った。

場所 北の国の山荘、モーツアルト家の居間とレッスン室

時 未来

ふたりとも40代半ば、若々しく活発であるが、じつはふたりとも死後の亡霊である。

第1幕

モーツアルトの女弟子D嬢がレッスン室でピアノを弾いている。顔が居間とつながるドアから垣間見える。見事な演奏、モーツアルトのピアノソナタ第13番k333第1楽章のパッセージ。太った娘、むくむくした力強い腕で奥行きのある太い音を出す。

モーツアルトは部屋着で居間のテーブルで朝のコーヒーを飲んでいる。ややあって、居間とレッスン室を繋ぐドア口に寄りかかって、弟子の演奏の様子を観察する。

D嬢…（弾きながら）先生、おはようございます。お目覚めですか？ 起こしてしまいましたら申し訳ありません。お約束の時間が待ちきれなくて。このソナタ、いかがでしょう？ ずいぶん練習してきました、先生のためでしたら一日中でも弾き続けられますよ！

モーツアルト…（微笑んで、無言、続けてと手振り以示す）

D嬢…（さらに力を込めて弾き続ける。朝の水色の陽射し）
上手階段から、アントワネットが降りてくる。部屋着。

アントワネット… ボンジュール・シェリ！ もうお仕事、早いのね！

モーツアルト近寄ってほほにキス。アントワネットのほうがちよっと背が高い。モーツアル

トはウエストがゆるく、やや肥満。

モーツアルト…（ききやく）ほんとに勉強熱心な子だ…

アントワネット、執事からコーヒークップを受け取り、ブリオーシュを摘まんで、再び階段をのぼりながら。失礼して…

モーツアルト、うなずいて、アントワネットを見やり、ついでレッスン室へ行き窓辺に立って演奏に耳を傾ける。演奏続く…

（暗転）

居間、昼前。

ふたりがソファに寛いでいる。

モーツアルト… 今日はお出かけるのかい？

アントワネット… ええ、湖畔で1時から。読書会があるの、お茶のあとはお散歩。一緒に行く？

モーツアルト… 行っておいで、ぼくは家にいるよ、2、3手紙を書かなくては…

アントワネット… そう、じゃ何かお花を買ってくるわ、あなたはチューリップが好き

ね…

モーツァルト… うん、赤いのがね…

アントワネット… (笑って) わかった。

(ふざけてトルコ行進曲を口ずさむ)

(続く)

闇から闇へと旅する 台本

富澤守治

みんな、忘れていないか？

日常の白昼夢のなかで住んでいるかぎり見えはしまい

この世に、世間にあふれている、いまや欠乏と絶望

不足と苦痛のなかに死と生の恐怖のなかにただ耐えているだけのひとびとのことを

― 闇から闇へと旅する、もう長い間、旅をしている ―

（旅人、否、漂泊のもの）

なぜ、消えていくのか、遠い声

とおに過ぎていった過去の歌声を呼び戻すこともできず

いまは枯れた井戸のなかにもその音は聞こえていたのに

問い戻すこともできず、二度と会えないひとの顔ばかりがおもい浮かぶ

(わからない、あの過去)

そこで起こったことに疑いがあった、そしていまもある。日食か月食か、世界が欠け消え始めていた

ふたたび日の射す幸福な日常へも、道は常になかば、たどりつけることもなく

そして明日はいやでもやってくるだろう (これもまたなぜかはわからないのだが)
ただ無意味に、白日にさらされる明日が

聞こえない、聞こえない、あのひとびとたちのかつて暖かった声

この大地の球体は急激に冷え始めている

凍えるこの私の孤独のようにして

無窮の宇宙のなかに私はただひとり、居る、孤独 (わからないまま)

いくばくかの愛を掬う、しかしこの手を見れば、震える

ただ椀の形をしているだけ、これほど渴いたうつわ（器）
もうずいぶん長い間、何にも満たされることもなく、常に「秋か、あるいは冬」

春は逝き風の如くも過ぎた夏またも変わらず冷る過ぎ越し

めでたくもなく、ただの「過ぎ越し」
こころ痛む、旅の果て、生涯のこと

※

（旅人、否、漂泊のもの）

数ある道は、たまほこ、常に別れを繰り返す、また現実にくくも道は別れ
多くの詩人たちは「道」に思いを馳せ、比喻に喩えるが

それは喩えではない、嫌が応でもない、あくまでも残酷な現実だった
どこかそのひとに、あのひとに繋がるばすが

無慈悲にも私の魂も引き裂かれてきた

たまほこに遠い涙の分わを問う道は恋しくそこにひとは居ず

語らう恋心は不思議で、そばに居てあれば、何気なく

離れてあれば、また心は火になり、会いたいと願う

なんとも疑わしき、頼りなく、心根は切なく甘く、何事もなく疑わしい
われ

あわれなり夢の御旗ひるがえるころせつなく繕いもせず

かの妹いもはどこに在るか！

※

(旅人、否、漂泊のもの)

いま一度！過ぎたるものを取り戻す

強靱であるべき、決意は毎夜している
友である者、友に成りうる者たち
わが遠吠えを聞け

幾夜果てようとも、われはかくてあり
かくてあるからこそ謳うもの

たま飾る頭のうえにある遠き星、限りあればこそわれの赴く

ゆく道の草深けれど、足は重く、さらに玉砂利が足うらを刺そうとも
「われ」は行かなくてはならない
旅に出たかぎり、道はどこまでも続くのだ

※

(旅人、否、漂泊のもの)

わたしは辛く、泣き出したくなる時、いつも鳥を見るのだ
彼らは飛ばなくてはならない

翼を閉じるな！落ちてはならない
ならない、ならない、いつまでも飛べ！

泣いてはならない、どんな苦しみが襲おうと、道を行かなくてはいけない

刺し殺す槍をキワにて取り絡め、白兵の名を堪へて残さん

われは白兵のもの、傷つき、身は折れても、なお戦いを強いられる
いやだと言っても、それはただ殺されるだけのもの

それはどれほど辛く、悲しいこと

そしてこんな生涯とは？、何事のものか！

※

(旅人、否、漂泊のもの)

ときには思い描いてみる、これほども荒れた世でなければと
往き春に見た夢を、往く春のままに思いつめ

ついこの数日のことばかりを気に煩い
春の日との不足、格差に青ざめている

タマシイが消えることなきあの春を、語るすべなくどれほどのものでなし

たまに笑えることもある、その束の間の過ぎたあとのさびしさは
どんな腹痛よりも、身に滲みて、苦痛にもだえおる
せめて正気のみは残せ、崩れ落ちて

苦しみ、悔^くしんで苦しく、狂^ぐわらずゆえに苦しくも苦しく

解説：うずもれて、ふたぎにむ

うずもれて

ふさぎこむ

いつもずいぶん長い時を見つめてきた
ただ見つめてきた

うずもれて

ふさぎこむ

いくつもの取り返しのつかない人生たち
多くのひとびとにとつても、多くの損失

21世紀の初頭、この窪地くぼちの国のこと

多くのひとびとと、この私もそう
例外などはない

いくらでも、無限の回数語られてきた舞台のセリフ

芝居は何度でも演じられる

行くひとと立ち去るひとのことを旅人という

うずもれさせるひと

ふさぎこませるひと、それらのひとたちはとって

相手を「旅人」として捨て去るか

ただ実のところ、旅人は行き着くところがあり、またどこから来たものなのかわれわれはここにいる。そしてずっと以前からここにいるのだ

うずもれて

ふさぎこむことを、そのままではいわけでもないのに

午前 林を歩く

清水鱗造

陽ざしにまぎれるトンボに仮装して

角を曲がると

誰もいない

誰かが一瞬

陽に溶けた気配

雲がなく明るい朝

林にある細い道の草に

仮装に使った

トンボの衣装が

陽ざしとともにまつわりついて

露に濡れている

少し昔の腕時計のゼラチンも

草を包む

そのとき

踏み固められた路面に

誰かが

コトリとかすかな音をたてて

話を置いていった

それは

あなたが早春に

花の咲く段々畑を

青空を背にして

登るのを見た

少し昔に綴られた話